

(5) 牡蛎採苗試験

1. 趣 旨

種苗の現地確保によつて移入費の節減を図る目的による前年度よりの継続事業である。

2. 概 要

1956年5月29日大宜味村塩屋湾に於いて日本産牡蛎を母介とする人工受精と天然採苗の二法に依つて実施したが56年度に於いては採苗することが出来ず(56年度事業報告済)57年度のエマ颱風に施設は破壊されたので天然採苗による分を養成した。

3. 経 過

1956年6月1日から隔日毎に採苗棚に附着器の懸垂を始め、6月13日には附着状況は不明であつたが5月23日の調査時では稚介らしいのが附着していたが確認出来なかつた。(56年度事業報告済)

1956年11月22日既設の採苗棚に懸垂した採苗器の中、各棚の中央部から(即ち6月の15日と17日懸垂のもの)各段共三連宛(一棚当九連)取揚げ調べた。品種は別問題として牡蛎苗の附着数から見た場合、採苗棚別に見た時は234号が良く、段別に見た時は中段、上段、下段の順であつた。各段の上層、下層を見た場合は、上段に於いては上層部に殆んど着生なく下層部に多く、中段に於いては上層部に於いて多く、中下層部に少く、中下段に於いては上層部の一部分のみで中、下層には殆んど着生がなかつた。以上から見て種苗の附着層は干潮線上1.5尺から3尺位迄の間で、干潮線以下及干潮線3尺以上の層は附着が少い事が分る。

品種別については未だ判断出来なかつたが4号棚はマガキ極似のものも多くケガキも多いが、35号棚は殆んどケガキで湾奥部の2号棚はケガキも着いているがマガキ類似のもの及びイワガキ等の附着が多かつた。

これ等の種異が果して何種であるかを成長後に確めるため竹管と採苗器を交互に針金に通して27連(1連17枚)を筏に垂下した。

4. 状 況

1958年2月25日(養種下より15ヶ月)の調査時には現存垂下連数は19連で1連当附着器数は9ヶ平均であつた。

附着器1ヶ当について日本種は1~2ヶで在来種は4ヶ平均位の附着で在来種が多いが成長率は日本種の方が大である。日本種の測定結果は次表の通り。